わたしも博物館人

はしかけの「織姫」と呼ばれるまで

はしかけグループ「中世のおんなたち」　立石　文代

私は、もともと草木染めをしたり、高機で布を織ったりしていましたが、3年前、琵琶湖博物館はしかけグループ「中世探検隊」に参加して「地機」に出会ってから、糸と布作りに熱をあげることになってしまいました。

地機は、高機より構造は簡単ですが、織るのは簡単ではありません。初めは、足の引っ張りと腰の動きが逆になって苦労しましたが、身体が慣れてくると、自分の動きがきちんと布に表れることにびっくり。道具の作りに無駄がないことに気づき、先人の知恵に感謝しました。

次に、糸作りにもチャレンジ。カラムシの生えている場所を人から聞いて採りに行き、茎から皮をはぎ、鬼皮をこそげ落として細い糸を取り出す。何回も何回もやって、ようやく薄く透き通った淡いグリーンの糸ができたときは、とても感動しました。

そして自分で作った糸で布を織ってみたくなり、教わった工程を思いだしながら、やっとの思いで一枚の布を織り上げました。苦労して績んだ糸が切れることもありましたが、柿渋で染めた糸も一緒に織ったのがよかったのか、自分では満足のいく作品に仕上がりました。

このようにして今日まで、はしかけの織姫（?）として、仲間と共に技を極める日々を送っております。

どこでも博物館

地域の良さがいっぱいつまった博物館づくり

主任主事（教育学）
西垣　亨

滋賀県草津市に、全長10kmほどの伯母川という小さな川があります。その伯母川のほとりにある志津公民館の中に「伯母川博物館」をつくりました。この博物館には、志津小学校５年生115名の子どもたちが、春夏秋の３回、琵琶湖博物館の学芸員とともに水生生物調査を行い採集した伯母川の生き物や、子どもたちのメッセージなどが展示されています。また、連携した地域の環境グループや子どもエコクラブの調査結果などの展示もあります。

伯母川の生き物の前で地域の方の思い出話を聞く

琵琶湖博物館・志津小学校・志津公民館の三者連携によるこの事業の主なねらいは２つです。１つは子どもたちに川遊びの楽しさを伝えること。もう１つは、地域の良さを再発見し地域の交流の場となる博物館をつくることです。伯母川博物館には開館１ヶ月で1500人の来館者があり、「伯母川にこんなに魚がいたとは」という驚きの声や「昔はこうやって魚をとったんだ」という昔話まで、地域の方の様々な声が聞かれました。

交流ノート

琵琶湖博物館では、12月から３月までの４ヶ月間“交流の場としての博物館”を目的に「展示交流員と話そう」を実施しています。各展示コーナーでは、来館者の方々と交流員との楽しい会話が聞こえてきます。今回はその様子をのぞいてみましょう。

恐竜骨格・復元（芦田交流員）

▶これはニワトリの骨で恐竜骨格を作られたのですね。

▶そうです。この標本は、お店で買ってきたフライドチキンを鍋でグツグツ煮て、骨だけを取り出し作ったものなんですよ。

▶手作り標本を作るときの苦労話を聞かせて下さい。

▶夜一人、背中をまるめて鍋の中から骨を取り出し、肉と骨とに分けてそうじしている姿を想像すると、ホラー映画の一場面のようですが、標本制作をしたあとしばらくは鳥料理が食べられなくなりました。

でも、関心を持っていただいたお客様が作り方を聞いて、「家でも挑戦してみよう！」と言っていただけると、その苦労も吹き飛んでしまいます。

漁具　魚をつかまえる・食べる（森永交流員）

▶琵琶湖で使われる漁具にもいろいろなものがあるようですが、ここでの交流のポイントは何ですか？

▶このコーナーには普段でもたくさんの漁具が展示されていますが、実際手に触れて、その仕組みを理解していただけるような交流をしています。

▶お客様の反応はどうですか？

▶漁具の仕組みに感心される方も多いのですが、年配の方から他の地方の漁具について教えていただけることも、このコーナーの楽しみの一つです。

ミクロの世界でプランクトンを見てみよう（橋本交流員）

▶このテーマを選んだ理由を教えて下さい。

▶プランクトンの美しさもありますが、小さな世界のなかでも「食う・食われる」の関係があることが驚きでした。

▶毎日のプランクトンにも変化があり、説明が大変ではないですか？

▶大変な反面、今日は何が出てくるのか楽しみで、ミクロの世界の不思議からお客様との交流が拡がっていくのがやりがいです。